

運命の輪

なが
かずひき

【序】

原罪とは想像力のことである。

想像力はむろん創造力であり、これさえ無ければ人は楽園を追わることはなかつた。

しかし、飛んでしまった以上、もう飛び続けるしかない。

その持続可能性を確保するには。

飛ぶことそのものを目的化する以外無い。

「生きる」とは本来、生きることそのものが目的である。

人は惑う。だから学ぶ。そして自分を変えてゆく。変わればまた惑う。この輪が回る季節を「青春」と呼ぶ。

若きうちは回る。年を取れば回す。この輪が回せなくなつた時、運命は静かに止む。

【原罪】

「……はあ。……想像力？　へー……」

「わかつてないだろ」

「うん？　ううん？　うん？」

「いや、まあ、いいさ。俺の妄想だ。忘れてくれ」

倫理の授業でキリスト教の「原罪」について教わった。先生の説明は要領を得ないので、ウイキを引いた。要領を得ない。「解釈はいろいろある」とかかる。なにそれ。

こういう時はポンちゃんだ。要らないことだけ知っている。
ちょうど生徒会のプリント折りがあつたので、手伝えと誘つた。

「面食らつただけ。説明、してくれると嬉しい
「説明か。できるかどうかわからんが」

と、

『原罪？ 想像力さ』

という予想もしない答えが返つて来た。さすが美術部、鬼面人を驚かすことばかり考えている。

「……人間を他の動物と分けるもの、を考えると、『メタ認知』に行き着く。だから『宗教』というものが人間の行動をよりよきように律するものだと仮定するなら、いの一番に指摘して釘を刺すのはここだと思うんだ。そもそも『神』という存在そのものがメタ認知そのものと言つていい」

「ちよつ、ちよつ、アクセル踏みすぎ」

「どこか難しいところがありましたか」

しつつ、とこう下まぶた越しにこつちを見るバカ。くそつ。

「冗談だよ。メタ認知というのは本来の語意より大雑把に、『自分を見てる自分』ぐらいで」

「それってホモ・サピエンスに特有なの？」

「知らん。というかわからん。ただ、実験ではチンパンジーでも『犬を見てるわたしをあなたが見てている』という認識はできないらしい。これ人間の赤ちゃんでもできるんだ。犬を指して母親を見て『ワンワン、ワンワン』という」

「ふむ？」

「つまり、動物は他者がどう世界を見ているか興味が無いんだ。

ということは、自分の世界を表現して伝える必要もない。

ということは、想像力は少なくて済む。『あ、この棒で突いたらあのバナナに届くな』ぐらいで十分

「ははあ」

「別の角度から言えば、アダムは知恵の実食べて『うわっ、オレ裸じやん！ 恥ずかしく』と思つたわけだろ。それつてモロに想像力であり、メタ認知じやん。他人はオレをどう見てるか、つていう」

「そうね。じやなぜ神様はその力を封じてたんだろう……つてああ、そーカ

「そりや人がどう思つてるか気にしなきや、そんな幸せなことはない」

「想像力の方は？」

「想像力は不安の源だぜ。明日どうなるんだろう将来どうなるんだろうって想像で
きるから、人は悩む」

「悩まないようにしてくれてたのに、どうして悩むようになつたのかな」

「そりやあんた、悩めば、神様を必要とするだろ?」

「ん? うん? えつ、だつて」

「本当に禁じるなら知恵の実なんかその辺に成らさなきやいいだろ。出来レースだよ出来レース。蛇もサクラ」

「またそういう言い方するー」

「人間が持つ力のうち最強のもの、それはつまりもちろん諸刃の剣となり、不安と名を変えて自分をも襲うもの、それこそが『想像力』だ、と昔の人は知つてたんだよ。

猫が呑氣そうに寝てるのを見て、奴らには悩みが無い代わりに、食い物を蓄える壺を用意する力も無い、とも」

「来年の収穫とか気になるもんね」

「俺には文化人類学かなんかの素養は無いんで、どのあたりで『神』という概念が生じたのかは知らない。でも、『大きいなる自然に対する畏れ』がいつかの時点でわかれりやすく人格神になつたんじやないかな。

ただその『畏れ』という感情というか感覚の時点で、それはつまり目で見てるもの以外の『大きいなる存在』を想像力で勝手に描いているわけだから、基本的に神様

と同じさ」

「えつ、ていうことはつまり……

想像力が、神様?」

「神様が想像力とも言える。人間の持つ力と悲しみの源泉、それが想像力。だから原罪とは想像力」

「うーなんかゴッチャになつてきた」

「ゴッチャなんだよ。全部一緒。つまり『自分を見てる自分』っていうメタ認知能力＝想像力の一部＝神様＝原罪。OK？」

「……いやー……それつてそんなのがそんな大きなものだとは思つてなかつたからいまパツと受け入れ難い」

「俺だつてそうだよ。この流れに気づくまでに人生をほとんど費やした」

「おおげさだね」

「いや、わりとマジで」

「……くすつ。でもポンちゃんらしいよ

「らしいか?」

「こんな変なこと、こんなに考えてる人他に居ませんよ」

「だつておかしくないか、なんだよ『原罪』つて、とか思わなかつたか?」

いや思

つたんだよな。思つたよな

「うん思つた」

「そんな『人は生まれ持つてアダムの犯した罪を償う』とかバカにすんなよつて感じですよ。知らないよそんなヤツ」

「ふふつ、そうだね」

「絶対解釈間違つてる。で、考えたのが今の流れ」

「西方教会二〇〇〇年の歴史に楯突こうつていうのが凄いですよ」

「バカにしてるなー」

「いいえー」

「間違つてるもんは間違つてるんだ。選択もしないことに責任負わされてたまるか。いや間違い、人間が進んだ道を無理矢理『選択』と名付けて、勝手に失敗成功を評価づけて罪悪感、罪の意識を生み出して自分たちの存在価値を高めるな、つつの」

理屈っぽいなあ……

この人たぶん芸術家には向いてないんだよね。言うときつと寂しそうな顔するから言わないけど。

「……でも、ポンちゃんのその見方だと、神様はまたせつかくの想像力を縛るわけだよね。教義とか、戒律とか。どうして？ 想像力が神様なら、神様そのものの力を弱めない？」

「だから神様はガン、というのが失礼ならウイルスなんだよ。強まりすぎると、宿主を殺す」

「雷落ちてくるわよ」

「だから言つてるだろ、俺と君がそういう神様を想像しなきや雷なんか落ちてこない」

「想像しちゃうわよ。わたしこう見えても信心深いんだから」

「どのぐらい？」

「毎日お仏壇にご飯をお供えするのはわたしの役目」

「うわ信心深つ。……仏様は落とさないだろ。こう、阿弥陀様はみんな救つてくれるらしいし」

「ウチは真宗じやなくてえーつとね……」

「うわ信心深つ」

「いやちよつと待つてホントド忘れ。えーつと……」

「お参りつていうのは自分の想像力を宥めてるんだよ。お参りしたから、神様や仏様のご機嫌がいい、と自分で思える、から心が平安。それだけのこと」

「曹洞宗！」

「聞いてる？ 禅か」

「怖い人だよね。福井の。誰だつけ」

「永平寺な。『正法眼蔵』」

「誰だつけ」

「使い切れない大きな力を持つとそれに振り回されるのは世の常人のならい。だからそれを外的に制御する必要があるのさ。誰でもがそんな力を使いこなせるわけじゃないから」

「でも想像力がないと社会が沈滯しちゃうじやない」

「だから宗教の夕方が強すぎた中世はどこでも沈滯してたんでしょうが。だからといつて想像力いくらでも發揮できる現代はまたこれいろんな弊害が起きてるなあ」「……使いこなせてないよね、想像力」

「ないね」

「だからといって戻れないよね」

「戻れないね。ナウシカが言うのさ漫画版で。

『我々は血を吐きながら、繰り返し繰り返し、その朝を越えて飛ぶ鳥だ』
と。

想像力を自発的に駆使すること、言い換えれば『進化への意志』これこそが人間が人間たるゆえん。動物と人間を分けるポイントだ。それをなくした瞬間、人は人間で無くなる

「血を吐くぐらいなら、檻に入つて檻の中で羽ばたいてる方がいいつて人、多そ
だね」

「お、ぱるつぺにしては詩的な表現」

「そう考えると、昔の人つて、偉かつたんだねえ」

「その、今の人間のほうが優れているって考え方そのものがダーウィンだかなんだ
かに騙されてんだ。昔の人でも偉い人は偉い。今の人でもアホはアホ。しかし
旧約聖書のこの『原罪』イメージ描いた人は、ものごとをよくわかつているな
「ぶつ」

旧約聖書に上から目線の人はなかなか居ませんよ。ここに居るけど。

「……じゃポンちゃんが妙ちきりんな抽象画を描いたり変なインスタレーションを

でつち上げてるのも、野獣のような溢れる想像力を飼い馴らしててわけかな？」

「まあ、そう、なのかもしれん。ただまあ、想像力、やつぱり全然無いよりは少しはあつた方がいいと思う」

「そりやそうだよね。つまり、人間の証なんだから」

「そう。……変なこと言いついでに言つちまうと、俺はこの想像力の使い方の一つ、『メタ認知』こそが人類を救うと思つてる」

「はあ！ 人類を！ また話が大きくなつたねー」

「人間の認識システムには二つあつてさ」

「はあ」

ポンちゃんは自分自身で考えをまとめるように目を逸らして言う。

「科学と悟りなんだ。

合理と神秘と言つてもいい。

この二つの認識システム間の齟齬、これが人類がこの二〇〇〇年抱え続けてきた大問題で、ここをうまく整理しないと次の二〇〇〇年は鬪えないと思うんだよ」

「？ 科学と悟り？」

「そうそう。物事を要素に分解してお互いの関係を式に記述していけば、いずれ世界は全て理解できる、という物の考え方」

「そつちが科学」

「と、ある一瞬にすべてが体得できるような、そういう認識の方法。例、自転車の

「乗り方」

「自転車？」

「説明できないだろどうやつて乗つてるか」

「えつ、それは……あれ。そういうえば」

「でも乗れるだろ。」

飛行機どうやつて飛んでるのかとか麻酔どうやつて効いてるのかとか、人類には知らんのに使つてる知恵や技術がいくらでもある」

「えつ。飛行機つてどうやつて飛んでるかわかつてないの」

「わかつてない。仮説はいくつかあるけど

「怖いじやない！」

「怖いんだよ。悟りという言葉がうさんくさけりや、神秘でもいい。『わからぬけど出現する』という認知がある。アイデアとか閃きつて、全部そうじやん。科学

すなわち計算の、外のところから飛んでくるから、突然価値が生まれるのであつて

「はー。そうね」

「ところが人間はこの二つをうまく使いこなせず、よくコンフリクト……衝突させてしまう」

「使いこなすもなにも、そもそもその二つがあるなんて普段意識してないよ」「そう。特に近代は科学がうまく行きすぎたんで、みんなわざと悟りを『無いもの』にしてるんだ。

熟達のトレーラードライバーは一〇メートルに及ぶ車体をバックで倉庫のヘリ三センチに寄せるんだ。それってなんの感覚だ？ 視覚でも聴覚でも触覚でもないだろ？ 強いて言えば自分自身の意識をトレーラーのサイズにまで合わせてしまうような神秘的な能力だ。説明がつかないから、完全に無視する」

「それどころか積極的に否定するよね、人魂とか、UFOとか、心霊写真とか」

「そのくせ正月に初詣行つて仏壇神棚拝んで四十九日に三回忌だ。否定するなら全否定すればいいものを。代償行為だよ。ふだん無視してる心の引っ掛かりが、そういうイベントで癒されるんだ」

「うーん……わたし割と好きだから」

「あ、だつたな。まともかく、『そつちを見ない』という自己欺瞞が社会に満ちてい
るが、『ある』のは『ある』のでその歪みが生じる。

歪みは必ずどこかで噴出する。

だから、合理的に物事を運ばなければならぬ時に神秘的な文言が挟み込まれ、
逆に感情や感覚の部分にズケズケと思考や論理が踏み込んでくる

「たとえば？」

「法と現実が合わない時に、現実に法を合わせようとしたり、法を無かつたことに
したり、現実を歪めて認識して法に合つてていると思いつい込もうとしたり」

「まだ抽象的」

「自衛隊とかどう？」

「あー……なるほど」

「無くすか、憲法を変えるか、どっちかなんだよ本来は。その時、『現実にあるん
だから法を変えろ』というのは、方向が逆」

「そうだね。まさにそのぶつかりあつてるところ」

「この手の『二つの認識齟齬』はそこら中にある。個人の生活にも常に立ち現れる
し、重大な社会問題あるところ、必ずありと言つても過言ではない。
いや逆かもしれない、認識齟齬こそが、熟議や対話を不可能にし、社会問題を生

む

「ふむ」

「問題を解決しようとすれば、合理的に納得できる方策を利害関係者が集まつて熟議すれば、本来はジリジリ解決に向かうはずなんだ。それがその、合理と神秘のぶつかり合いみたいなところに巻き込まれて、ぐしゃぐしゃつとなる」

「巻き込まれるつていうか」

「巻き込むというか。つまりほんどの人が、そこんところの区別がついてないんですよ。だから議論がすれ違う。違うレイヤー、階層の話をしてて話がまとまるはずないじやん。自衛隊の例で言えば

『安全保障を取るか、平和憲法を取るか』

みたいなことを、いいオトナが平気で言う。こんなもの前者と後者で問題のレイヤーが全く違うので、これが対立しているという図式そのものがおかしい。両者を満たす解もあるだろうし、両者とも満たさない解もある

「にやーるほど」

「で！ だ！ つまり『メタ認知』が人類を救う、というのはそういうことで、おたがいが『いま自分はどちらに根拠を置いてどういう認識をしているか』を把握できていれば、少なくとも合理と神秘のレイヤーすれ違いの議論にはならない。

身も蓋もない言い方をすれば、合理的な解に落とし込める条件闘争か、感情的な殴り合いによる決着か、なにかがつくわけですよ

「でも結局、殴り合いなのね」

「そりや最後はそうですよ。ボクは親鸞キミは道元、結婚したらどつちか捨てなきゃいかんでしょう」

「するの？」

「したら！　もう、変な想像させないで！」

「こつ、こつちの……いや、捨てなくともおたがいの信仰を尊重して」

「墓どうすんの墓。形違うよ多分」

「じや最近型のこう無宗教のユニット墓地みたいなところへ……」

「それぐらいだつたらもう散骨がいいな」

「んー……わたしやつぱりお墓は欲しいな……」

「女の子だねえ」

「女だからか？　いやあのね？　……あ、でもなんかスッキリ殴り合えるね」

「だろ？　わかつてもらえて嬉しいよ。そこで、いや『親鸞の方が素晴らしい』とか『道元の方が偉い』とか言い出すから、ムチャクチヤになるのよ。問題はそこじゃない」

「議論すべき点がすれ違つてるのね？」

「そう。それどころか状況は最近もつと悪くなつてる。

多くの人がなんとなく、なんだけどその『科学』って実は思つてたほど強力じやないんじやないか、限定的じやないか、穴だらけじやないか、と気づき始めた『じやなきやスピリチュアルだのパワースポットだのつて、流行らないもんね』『うん。ただ多くの人が自分の中でもさつき言つたように整理できてないんだよ。

初詣行くくせにA B O式血液型占いを叩く

「ははあ」

「都合のいいところだけ『科学』の、つまり原因と結果が一対一で対応してゐる決定論的世界観が欲しいんだ。いい例が医療

「お医者さん？」

「ピロリが居なくとも胃潰瘍になるし、ヘルニアがあつても腰痛にならない人も居る。だけど、それとこれが一対一対応してて、『薬や手術で原因を取り除いたからもう安心』というデカルト的世界であつて欲しいんだよ。だから、『その腰痛は心因性かもしれませんねえ』と指摘すると狂つたように激昂する

「あわかつたつまりそうすると手術じや治らないかもしけない、つて不安が生じるのね」

「その通り。そのくせ、地鎮祭やつて七五三参りして厄年にお祓い。なんだよそれ。つまり守つているものは腰でも医学でも常識でもない、自分の中の『安心』なんだ。

それもなんの根拠も無い」

「自分の世界が崩れそうな時ほど、人間必死になるもんだよ。ダンナの浮氣を告げ口された奥さんみたいな」

「ああーいい例え。みんなビビつてんだよ。科学が穴だらけつてことを認めたら、その穴は暗い地獄だとでも思つてる。違うつて、そこを埋める明かりもあるんだ、バキボキッて一瞬で腰痛を直す民間療法の人も居る。そこうまく、使えるもの使えばいいだけなのに、なんかもうお城は全部石でてきてなきやダメ！みたいな」
「あるいは真逆で、そういうのにはがりついて本来できる手術もしないとか」「輸血しない宗派とかな」

「中世にそういうものが猛威を奮い過ぎて、人類のトラウマになつてるのかも」「そうかもしけん。といつても、どちらからも逃げられないんだから、なんでもうまいこと折り合いをつける、というあたりまえのことができないのかな、と」

「人間は……依つて立つ確固たる『何か』が欲しいんだよ」

「そりやわかる。だけどそれは生きるためだ。そのため殺されたらなんの意味があるんだ」

人には絶対見せない険しい顔。正義のヒーローは時に冷酷。

「……だいたいわかつた。でもわたしちよつと思つたのが」

「うむ」

「そのメタ認知力つて、人による氣がする。ファッションセンスと同じで、強く持つてる人から、からつきし無い人まで居ると思う」

「……む。しかし想像力ぐらいみんな持つてるだろ。じやなきやそんな神話が受け入れられるわけでもなし」

「想像力はね。でもそれをこの用途に使える・使いたいとは、限らない」

「ムムム。ムー……そこは教育その他であるレベルまで鍛えて……いや、それは難しか。色のセンスとか、もう天性だからな。まあある程度はセオリーあるけど。ムーン……」

「さらに思うのがインセンティブ、もつと言えばメリットが無いのよ。そういう物の見方をすることに対する」

「いや、それは物事を根本的に解決する観点が」

「でも具体的な解決法はお医者さんへ行くか、お祈りをするかの二択だよね？」

「同じ行動を取るにしたつて覚悟が違うじゃないか」

「覚悟。んー……」

「人間なんか極端に言えば納得するために生きてるんだ。ある行動の結果が第三者的に見て成功だろうと失敗だろうと本人が納得すればそれは成功だ」「いやあ……そーかなー……そんなこと言い出したら判断を全部外に放り出してしまうことだつて、本人が納得してればいい、つてことになるよね」

「うん。いいよ。殺されるけどな」

「またそうやつて人を信じない」

「信じられる人間だけ信じないと、信じてる人間にまで迷惑かけるぞ」「うーん……」

「そのところが、わたしとこの人はちょっと違うのかもしれない。

「でもツカサくん……」

「なに」

「えらいこと考えてるんだね」

そこは眞面目に感心した。

「考えたくて考へてるわけじやないさ。ただ、なんかどうにも俺には世の中が気持ち悪くて気持ち悪くて、なんでこんなに気持ち悪いんだ、憂鬱なんだ、わけがわからんんだ、と掘つて掘つて掘つていつたら、こんなところに辿り着いた」

「苦労したんだ」

「まあね。

わけがわからぬはずなんかないんだ。わけがわかるだろうところはいずれわけがわかるだろうし、わけがわからぬことは永遠にわけがわからぬ。

つまり、わけがわかることとわけがわからぬことを混ぜるから、わけがわからぬ

な
い

「な、なるほど？」

「だから、

わけがわかつてることと、わけがわかつてないことを、わける。

これがだいじ。

これぞメタ認知。

これが人類を救う！

「ふーむ……」

……あれ?

それ最近どこかで聞いたぞ?
どこだっけ……

「……しかしあれだ。この話にばるつペがこんなに食いついてくれるとは思わなか
つたから、おいやん嬉しいよ」

「そお? わたしこういう話嫌いじやないよ?」

「そうなのか。こういう空中戦つてか抽象的な議論みたいな嫌いかと思つてた。
『ヤマハ発動機』の異名を取る超現実主義者あなたが」

「それポンちゃんが勝手につけたアダ名じやない。それにわたし現実主義者でもな
んでもないよ。どちらかというとロマンチストですよ」

「はあ!?

「好きな本は『三国志』だもん」

「『三国志』でロマン……んーまあロマンといえばロマンか
「ロマンですよ赤壁の戦いでね、」

「わかつたわかつたそのへんは」

「あなたにその中途半端な歴史オタウザいつて感アリアリの反応」
「なにもそんなこと言うてまへんがな。……ぶつ」

「なに」

「いやさ、丸山眞男が言うんだ

『女は動物か神様である。人間ではない』」

「なにそれ。失礼なー」

「まあまあ。いまの話で言うとつまり、人間の根本矛盾にブチ当たらないように避

ける事が巧い、という褒め言葉だよ」

「あー……つまり現実に貼り付くか、妄想に跳ぶか、ってこと?」

「そそそ、そんな感じ」

「んー……そういう言い方するなら

『男はバカか狂人である。人間かもしけないけど』」

「わはは、そりやいいな」

「『三国志』読んでると男の人ってなんであんなバカか狂つてるのかの一択なのか
と思うよ」

「矛盾は一応意識すんだよ。義理オア人情とか。そこでどっちかを無理めに選択す

るのがバカ。わけわかんなくなつて理解不能な行動に出るのが狂人、かな。なるほどね。だから俺が苦手なのかもしれない、中国の古典』

「あれつ、そうなの？ 杜甫李白に王羲之、藝術の華開く中華大帝国だよ？」

「いや、人がいっぱい死ぬから……」

「ローマ帝国だつて戦国時代だつて死ぬじやない」

「いやそうなんだけど、なんかこう英雄豪傑だけがクローズアップされて、われわれ庶民がボロ雑巾のように殺されるだろ」

「だから同じだつてば」

「描いてないんだよ！ 中国人は描くんだよボロ雑巾を！」

「……そつちの方が誠実じやない？」

「……誠実かどうかはともかく正しい気はしてきたな……」

「でしよう!?」

「なんであんたが威張るんだ」

「中国古典は四大文明ですからね、人類の元ですよ。紙に火薬に羅針盤、ね」

「なんかそこから人類つて進歩してないよな」

「そうだねえ……」

……は。あそだ、それだ。

「そうですよそ、さつきの話」

「ん？」

「『わかつてることと、わかつてないことを、わかる』

「それね、孔子様も言つてる」

「ほう。孔子つて……儒教の人か？」

「イエース。『論語』に書いてあるのです」

「へー。『論語』か。『名前はよく聞くが読んだことの無い一〇の書物』に常に工
ントリされてるな」

「不幸なことだよね。じゃ『原罪』について教わったお返しに『学習』についてお
教えしましょう」

「おおつ、大きく出たな。しかし学校教育などという糞ドつまらん『ためにする』
勉強を淡々とこなせる山葉先生の言うことだ、拝聴しようではないか」

「褒めてないねー」

「褒めてるさ。俺には賽の河原の石積みはできねー」

「その考え方を、変えてみせよう」

「おおう……期待していいのか？」

「ふふふ……あその前に河岸を変えませんか」

プリント折りは、とうに終わっていた。

「そうすつか。ミスド？」

「でいいかな」

腰を上げた。

いま聞いた話と、識つている話をひとつにまとめるにはたぶん時間が掛かる。

それならコイツの頭も借りようと思つた。

【学習】

——席につくと、ヤツはシャーペンとルーズリーフを取り出して左手でカクカクと女子らしくもない不必要にキッチリした楷書で、

『知之爲知之

不知爲不知

是知也』

「……孔子様に、ポンちゃんみたいな暴れんボーで生意気な弟子に子路つていう人が居たのね」

「最期塩漬けにされて見世物にされた人だな」

「つまんないことだけ覚えてるね！」

「だーらそーゆーことが心の傷になつてんだつて」

「その愛すべきバカのために孔子様が説くの。『子路や、『知る』ということはどういうことか教えてあげよう』で、こう」

「なんて読むの」

「さつきのとおり。

『知つてることを知つていると認識し、知らないことを知らないと認識する。これが知るということだ』

「え。……同語反復……じやないな、えー循環、してないか?』

「うん回つてる。

そしてその回つてることが凄くだいじ。

回すことができるから』

「???

うわあ……ものつそい勝ち誇り顔ですよ……女子が鼻の穴そんなに拡げていいいんですかね。

「回つてることはとりあえずおいたいて、『知る』つてことはわかる?』

「ああ、確かに俺の話と構造そつくりだ。わかつてることを合理的な説明がつくところ、わかつてないところは神秘的な領域、と考えれば』

「そそそそ。合理的な部分と神秘的な部分を分けると、話がわかりやすくなるよね、

本田理論で言うと

「へーつ、孔子様偉いな」

「偉いんですつてば」

「えつ、ちょっと待つてじやこれ一〇〇〇年前から孔子ちゃん問題として認識したことなの？」

「そ。二五〇〇年かな」

「まあじでえ!? 僕この問題解けたらノーベルなんか賞かなんか貰えると思ってたのに!!」

「甘いですよ世の中賢い人いくらでもいるんだから。ポンちゃんが考える程度の問題は誰でも考えますつて」

「マジで……いや、まあ、そりやそうか……」

半分冗談だが、半分本気だ。

今の気分は、パズル雑誌の解答を見ちゃつたような、「ああそういうこと!」という感じと、「解きたかつた……」という感じと。

「ふふふ。でもこの考え方って凄く応用が効いて、たとえばノーバート・ウイーナ

ーが説くところのサイバネティックス

「えつえつえつ」

この人の口から『サイバー』とか。

「ファイードバックによつて制御を変える、という考え方は、行動した結果を入力に入れ直してまた行動する、その回路だよね」

「えつと、えーっと、サーモスタッフとかそういうもの?」

「まあそういうものの。これは前もつてプログラミングできる。
でもウイーナーによれば『学習』は『ファイードバック』よりさらに一段階高度な
概念で、返つて来た結果によつて自分を変化させること。いわばプログラムそのもの
の書き換えること」

「はあ」

「知つてることと知らないことを分けたら、次は知つてることを増やすべく『学
ぶ』わけだよね。これつて自分が変化して、新しい自分になるじゃない? これが
『学習』の本来の意味よ」
「はー……」

「だから、どんなに今の自分にとつて意味や興味の無さそうな物事であつても、『自分を変える』という観点に立つてみれば、わりとなんでも、意義のあることなのよ。

漢文なんかたぶん日常なにも役に立たないけど、それによつて変化した自分は、こうして孔子様の言葉に触れた時、より強い反応ができる。そしてまたこの言葉によつて自分を変化させることができる。またそれがなにか新しいヨロコビやシアワセを呼んでくれるかもしれない。

だから、『学習』はだいじなの

「はー」

なんかスッキリしすぎて、ものすごく騙されてるような気分がする。

「正確に言うと、学ぼうとする姿勢。その姿勢があることを孔子様は『仁』といい、常にそうである人を『君子』と呼ぶ。

そういう人には進むべき『道』が見え、道を行く上で行うべきことが『義』であり、君子がおたがいに学び合うようなコミュニケーションを取つてている様を『礼』という

「ハー」

「『忠』という言葉は文字通り！　自分の『心』の『中心』に従うということで、自己欺瞞に陥らず、自らが本当に正しいと思うことを為す、という姿勢のこと。決して家族や国家や企業の言いなりになることではない！」

「ハハー！」

「……どう？　孔子様、偉大でしょ」

「偉大偉大。でもばるつぺも偉大。こんな凄い解釈があの古ぼけた本からできるとは……」

「ただの処世訓なら二五〇〇年も持りますか。人生の真理、宇宙の真実がそこに描かれているからこそ、貝原益軒も『宇宙第一等の書なり』と絶叫するわけですよ」「ハハハー！」

俺は思わずテーブルに両手を突いてひれ伏した。

「ふふつ。……種明かしをすると、これ安富先生っていう東大の先生の受け売りなの。最近『超訳論語』って本を読んで感動してー」「……なんだもーーーーーー！」

腰が抜けたかと思つたぜ。

「ごめんごめん。でも、いいかんじでしょ？」

「いや、素晴らしい。なるほどね……すごいな孔子」

「『東大話法』シリーズもおもしろかつたな」

「どうだいわほー？」

「……あつ、だからこれもそうだ。さつきの話。自分を客観視してメタ認知できる、
というのが人間の諸刃の剣、つて言つてたよね」

「うん」

「『東大話法』というのは、自分を傍観者の位置に置いて、相手を煙に巻き、議論
を混乱させて、自分の立場に有利なように持つていく話芸のこと。

「ほら、東大卒の官僚の人の話とか、もう何言つてるかわかんないでしよう。あれ
は高度に鍛えられた技術で、つまり『何言つてるかわかんないけど、わかんないの
は私が悪いのか？』という気にさせる話法なのよ」

「へーっ。それおもしろいな。けどそういう人、たまにいるな」
「いるよね！」

「いるいる。いる。俺一年の時に生徒会にさ、美術室の利用の仕方で交渉に行つたんだけど、その時の副会長がそんな感じ。

なんかぐちやぐちやぐちやぐちや言つてんだけど全然要領を得ないの。ダメつて言う根拠がわかんないし、じやあなたが責任者として断るんですか、と訊いたらはぐらかすし、じや俺達の責任で勝手にやりますよ、つーとそれは困るというし

「ああなんか目に浮かぶよう」

「そうだ、そうだよそれも合理と神秘の齟齬だ。だからこつちはダメならダメで理由が合理的か、それかもう『しきたり』とか『この先生が許可しない』とか、責任所在ハッキリしてくれるとき、スッキリするし対応もできるのよ。けどそれがぐちやぐちやだと」

「だからそれ、わざとぐちやぐちやにしてるのよ。意識的か無意識的かまではわからんないけど」

「はー……え、なにヤストミさん？ メモつとこ

「本も面白いしネットで講演とか上がつてる。京大卒の大坂人だから話が巧い」「へーっ」

「世の中すごい人いっぱい居ますよ」

「なにそれ、独りでのたうち回つてた俺への嫌味？」

「ううん逆逆。そんな偉い先生や孔子様が考えたようなところに辿り着くなんて、さすが本田宗だ、つて」

「また心にも無いことを。……しかし元ネタがあつてちょっとホツとしたよ。なんだか幼馴染のぱるつぺがいつの間にか遠くへ行っちゃつたようで」

「ふふつ。どこにも行きませんよ。『論語』読んでおこうかな、と思つて書店での『超訳』に引っかかつて、そこから芋づるで」

「文字通り『学習』の大切さだなあ。いやー……反省」

「それそれ。反省して行動を改めるのが、『君子』ですよ」

「俺だいたい反省するけど行動改めないからなあ……」

「それはよくないね。『小人』だね」

「とほほ。そつかあ、ファイードバック、学習……ああ、まさに、こうやって、パツと新しい『知』を受け入れることこそ、『知』か」

「そう。わたし思うんだけど、『賢い人』つてつまり学習が出来る人のことだよ。

常に学ぼうとしているから、自分の知らない知識や体験について好奇心があるし貪欲に吸収するし、それによつて変化していくし、そういう経験があるからいつも謙虚だし、人の話をよく聞くし

「それぞ『賢人』つて感じだな。『勉強ができる』とも『頭がいい』とも違う。本

来俺たちやそういう『賢さ』を目指すべきなのに、なぜか『勉強法』とか『頭が良くなる』に引っかかるつちまうんだよなあ』
『不安に付け込まれてるよね。本来、学習は姿勢だよ。学ぼうとしたら、人は学んでいる』

「うんうん」

「地頭の良し悪しか、何時間難解な書物に没頭したとか関係ないの。孔子様もおつしやつてますよ、『一日寝食忘れて考えたことあつたけど、学ぶに及ばなかつたよ』って」

「うーん、うー……俺は、小人だなあ……」

「そんな落ち込まなくとも」

「……いや、でもスッキリはしたぞ」

青春に落ち込んでる暇などないので。

「ということは、君子であるためにはその学習回路をできるだけ高速・高回転で効率よく回した方がいいな!」
「だから、そういう生々しい功利的な考え方そもそも良くないんだって

」

「まあそういうな。小人だらけのこんな世の中じや、自分の性能も上げていかないと東大話法に絡み取られちまうぜ……つてかあんたの方がサクサクお勉強してるじゃないの！ キーッ！」

「へへへ。わたし本質的にこういうのが好きみたい」

「苦手」

「苦手だよね、理屈通らないこと。ポンちゃんと昔からね」

「苦手」

「そのくせ芸術的なもの大好きで……あ、そうか」

「そうそう。さつき言つたろ？ 僕、神秘が嫌いなんじやないんだ。しつかり分けてないものが、嫌いなんだ。だつてラピスラズリのお守り買つたことあるもん」

「ホントにいいい!? あん、あんなの!?」

「初詣でお札買うだろ神社で。似たようなもんじやん。売り込んでるから当たりやめつけもんだし」

「いや……いやー……いやー……わたし占いとかはよく見るけど、あれは買わな

い」

「買ってみないとわかりませんよなんでも」

「で、どうだつたの」

「効くわけねえだろ」

「やつぱり……なに頼んだの」

「山葉さんと恋人になれますよーうに」

「あははははははははははははははははははは!!」

「ちよつ、声が、大きい！」

「……すいません、すいません。

……そりや効かんわ」

「冗談だつづーの」

「ホントのお願いは?」

「ぴみちゅ」

「どうせ『世界平和』とかろくでもないことでしょ」

「『魔法を信じ続けることができますように』、かな」

「はぐらかした……」

「しかし『学習』こそが成長の源泉だとするなら、GDPとかで成長とか測れない

な

「そうだね。成長とは変化していくこと、だからね。変化前の物差しは、使えなく

なる

「ならば成長は『学習』の機会の多様化と多数回化か……いろんな人と会つた
り？」

「良書を読んだり」

「興味を持つたら現場に行つてみたり。」

「……ありきたりだけど、やつぱり基本そういうのかなあ」

「そうだよ、わかつてもそれができないものね。めんどくさかつたり、気後れが
したり」

「逆に言うと……変化が成長の果実であるならば、変化できないような学習はスカ
かな」

「まあ、全部が全部無駄ではないでしようけど」

「あまりかけ離れたところに手を出しても変化できなさそうだし、くつつき過ぎて
るとまた変化が無さそうだし。なんか筋トレみたいだなあ」

「アタマもカラダですし」

「今日のぱるつペはキレッキレだよ。やっぱ筋トレなのか」

「そうね。目標を立て、やるべきことを見える化し、自分が時間あたりにできる量
と質とでそれを割り算してどれほど掛かるか見極め、あとはひたすら淡々とこな

す

「無理だなあー」

「ポンちゃん頭はいいんだから頑張んなさいよ」

「俺RPGのレベル上げでも無理なのにそういうの無理。計画立てた段階でお腹い
っぱい。飽きる」

「だからそこも『学習』なんだって。飽きないようにやるのよ。やつてるうちに計
画はガンガン変わるの。いえ、変えるの。思つたより進むこともあるし全然歯がた
たないこともあるし、弱点だと思つたことがさほどでもなかつたり、長所だと思つ
てたものが思い込みだつたり、やつてみないとわからない。そこを修正して、より
よい計画を立てよりよい実行を為す」

「なるほど、そう聞くと少しマシだな」

「計画スタート時点とは全く違うことをやつてることもあります」

「そうなんだ」

「そう。それがおもしろいの」

「もつと艱難辛苦を耐え忍び、かと思つてたよ」

「それじゃもちませんよ、もちません」

「もたないよな」

「もちません。最高なのは楽しんでやることです。なんでも」

「だよなあ……」

「ポンちゃんだけ楽しそうに絵描いてるじゃない、夜遅くまで」

「うんまあ。……そつか、作品づくりも全く同じだ」

「そうなの？」

「ああ。おおよその完成予想図は頭の中にイメージするよ。でも描き始めるとどんどん『ここはこうしたい』『こつちはこうしよう』が出てくる。それに従つて行くと、最初のイメージとはなにからなにまで違う絵ができることもしばしば。……つていうか、ほとんどそうだ」

「へーっ。わたしまあいいうのつて、イメージがピシーッとできてるもんかと思つてた」

「まそういう人も居るのかな？」

「ほら、完璧主義者の映画監督がメガホン振つて『そこは違う!』とかつて」

「ああ……いや、それも結局はその時の役者の演技からインスピレーションを受けたりしてると思うよ。むしろ、監督や演出や脚本のイメージを演技で変えてしまうような役者が、いい役者じやないかな」

「結局じやあなんでも、始めないと始まらないのね」

「そうだなあ。最終的には現実を動かすというか、実践というか、なんかこう、作品を作り上げるなり、プロジェクトを完遂するなり、しなきや意味が無いわけだろ。どうしてもイメージと現実を繋ぐ、接続する、落としこむ、つて作業は非常になんとか具体的というか技術的というか物理的というか、泥臭い。」

「俺も『こここの色出ない』つて泣きながら三時間ぐらい絵の具練つたことある」「そんなに？」

「まあそれは俺がヘタだつたりイメージが貧困だからスイートスポットが狭いからだけど。それでもやつぱ最後頭ん中を『現実』にするためには、まず取り掛かつて」

「そこからフィードバックを得て」

「また工夫したり改良したりして事に当たる、その繰り返し、しかない、と。整理して考えりやアツタリマエのことなんだがな。なんでこんな基本的なこと忘れて腕組みしてウンウン唸るんだろう？」

「いまウンウン唸つてる」

「うわあそだ！ ヤベエ、ほとんど癖になつてんじやねーカ。ええと学習学習、実践実践、と」

「ふふふ。……ねねね、久しぶりに映画観に行こつか。なんか触発されたよ」

「お。いいね。なにすべか」

ケータイでいつも行く映画館のWebを出して覗く。

「……わたしこれ。『シユガーマン』。忘れ去られた奇跡の音楽が時空を超えて甦る」

「良さげだが……俺は『プリキュア』」

「プリキュアア!?」

「あつバカにしてるだろお前、これオールスターだぞ、みんな出るんだみんな、ホレ

「うわつ。なにこれ五百羅漢？ 何人居るのこれ」

「たくさん。これみーんな一年掛けて地球を守ってくれた天使達、本物の天使達」「わかつたから。なに、推しメンとか居るの」

「みんな素敵なんですけど強いて言えばキュアピーチ。この人」

「……男の人金髪好きねえ。ツインテールって言うの？ こんなのファンタジーですよ、こんな髪型。現実に居たらおかしいでしよう？」

ファンタジーだからいいんじやないか、という言葉をぐつと呑み込み死神の鎌をかける。

「いや？ そんなことないよ可愛いと思う。春さんにも似合うと思うよ。ちょっとやつてみてよ」

一
え
ー
?

「いいからいいから。このへんできゅきゅつと」

耳の方で両手をくりくりつとしてみると、釣られるようにセミロングの髪を後ろから持ってきてキュキュッと……

激写

「あーっ！」

「ほらほら、ほら！
かわいい」

「だから、声が、大きい

「……すいません、すいません、なんども。

ちよつ、これ、消せ！』

「いいのか？ 消したらむしろ胸のメモリーにたいせつに焼き付けるぞ」

「酷い……田舎臭い……『花子さん』つて感じ……」

「いま全国の花子さんを敵に回したな。あんま変わんないだろ『春』と」

「これ小学生低学年までねえ……」

「しかしこれの似合う俺のピーチさんは普段からこれに近い髪型」

「いくつ」

「一四。身長は一五九。……ほら」

「あー……だからこれは、ファンタジー。いいから消せ」

「あわかつたじやあお返しに俺がピチピチのレザーパンツ履こう。すごいぞ、トランクスのラインが出ちゃうぐらいピッチピチ。だから素肌に履いちゃう」

「それわたしに何の益があるの」

「君の好きなジャニーズやエイベックスや韓国人がよく履いてるではないか」

「その中の特定の個人が好みなのであつて、レザーパンツが好きなんじやないの。わかる？ それよりそんなの持つてるの？」

「善二郎に借りる。あいつバイク乗るから」

「川崎君？ カエル色のジャージか迷彩服しか見たこと無いけど」

「あとタンクトップな。んー……」

「じゃ奢れ映画」

「『プリキュア』なら」

「『シュガーマン』！」

「ちつ。……まあしかし、勉強のことで勉強になりました。ぼくもバリバリ『学習』して成績を上げようとおもいますので、砂糖男にしておきましようか」「よしよし」

「いや、なんか真剣参考になつたよ。……さつきの話、認識齟齬を、メタ認知をさ」

「あー、はい」

「どうやつてその間を埋めるのか、うまく接合させるのか、あるいはメタ認知状態をキープできるのか、自在に発動できるのか、って考えてたんだけど、あたりまえだけどいいアイデアなんか無くてさ」「そりやそうでしょ」

「でもこれってつまり、『学習』が働いていれば常にこの二つの『知り方』について、今どつちが動いてるか、ぐらいの意識が働くから、ま少なくともあんまり混乱することはないよな」

「そう、かな」

「だつて自分を変えるには、自分を客観視してゐる必要があるだろう。もちろん無意識に変わつていくこともあるだろうけど、変わる・変えると意識してゐる方が、よりはつきりわかるよな」

「そう、かもしれない」

「これぞメタ認知。ということは、はしょつて言つうと、『学習』してれば人類は平和だ」

「はしょりましたね。まあでも……そななるのか」

「……ただ。……おかわり貰つていい？」

「どうぞ。あ、わたしも」

「ここで『わたし行つてくる』と言つと、ポイント稼げるぞ」「ポンちゃん以外になら言つてるって」

「ありがとう。

すいませーーん！　おかわりくださいーーい！」

「うわあアテコスリ」

「違うつて。ここバイト夜になるとてんでおかわりチエックいかねーんだよ。本部にチクつてやろうか」

「クレーマー・クレーマー」

「学習の機会を与えていると評価していただきたい」

「ポンちゃんそのああ言えばこう言う癖、止めないとモテないよ?」

「それが俺様だから!」

「学習しなさいよ」

「これに限つては俺が合理的にも神秘的にも正しい」

「やれやれ。……ただ?」

「ああ。えー……なんだつけ。あそうそう、さつきの逆襲をさせてもらえれば、そ
の『学習』こそ生まれつき濃淡があるもんじやないか?」

「はい? なにを言つてるの、誰でも学ぼうと思えば学べるじゃない。効率や速度
には差はあつても。あと、学校の勉強は嫌いとか、そういうのはあるだろうけど」

「いやそうじやない、学ぶためのインセンティブが無い人が居るだろ?」

「そんなバカな」

「だつて考えてみろ、この世の中なんだから、大多数がやつてること見てそれを真
似するのが一番効率いい生き方だろ。ほぼノーコスト、学習無し。そんな人いっぱ
い居るだろ?」

「そういう人はそれで幸せなんだから、いいんじやないの?」

「うわ、それでいいのか。超現実主義め」

「だつてそれはその人の生き方だもの。そんなものまで口挟めませんよ」

「選挙権ある以上付和雷同では許されまい。ポピュリズムに墮して社会が崩壊す

る」

「それは選挙制度の問題じやない。あるいは墮したポピュリズムで自分の首締めるのは自業自得でしょ？」

「うわー……じや、ま、今はそれは別問題として横に置こう。しかしそもそも学校の勉強は『学習』としてわかりやすいからいいんだが、しかし学校の勉強以外、普段の生活でその、くるくる回る学習回路を発揮させるには……どうすれば？」

「海外旅行に出かける前から現地のお店での買い物を心配するタイプだね」

「想像力の諸刃の剣に切り刻まれている」

「そうね……そう、んー……まあ、仕事では学習が必要だろうから、それ以外の時ほぼ一つとしてればいいんじゃないの？ それこそ、犬、猫のように」

「飽きたらん。春理論に従えば、学習こそが人間が人間である所以だぞ」

「本田理論では想像力じやなかつたつけ」

「『想像力』をうまく使いこなす方法論が『学習』だ」

「じやそれでいいじやない」

「学習をどうやるか、これが次の問題だ」

「そお？ そんなこと言つてるとその『やり方Xのやり方Y』つて無限の階段を上がつちやうわよ？」

「いや、それはちょっと言葉が足りないかな、つまりフィードバックと学習の違うのよう、学習回路が働いて、つまり仁であればいいわけだが、人はこれをすぐ忘れる。」

学校の勉強なら『明日学校がある』と毎日わかつてし、いずれ受験もあるし、期末にテストもあるし、学習を意識せざるをえない。

ところが、学校以外では……というか、ほとんどのひとにとつて学習を意識する機会はほとんどなく、よつて成長もしなければ俺の言う原罪、つまり認識齟齬の解消もできない

「あわかつた、つまり『計るだけダイエット』みたいに、いつも学習を意識できる方法が無いか、つて話ね」

「そそそそ。階層で真上にあがるんじやなくて横からアシストするような。ま、癖や習慣のものだと思うので、馴染んでしまえばそんなもの要らなくなるんだろうけど……だが我々はあまりにも学習しなさすぎる」

「そうねえ。想像力も暴走しつぱなしじね」

「ああ。 いまだつて見ろ、他人から見たら俺たち二人付き合つてるのかな、と思われてると思うと背中が痒い」

「そんな風に見られてるはず無いって。 どう見ても……どう……どう？」

「ほら！ ほら暴走してる！」

「えつうそ、だつてほら、彼氏彼女っていうのはああいう」

窓際の端の席の俺たちと同じぐらいの男女ペアは、仲良くスマホのイヤホンを半分コにして小さな画面を覗いてにやけていた。

「……しあわせ感が必要だよ」

「しあわせそうだよなあ。 ……いま不幸せ？」

「……ふつー。 ま、ね、人の目なんか気にして、代表にはなれませんから」

「そうだ言いたい奴には言わせとけ。

『走つてない奴は黙つてろ』

これナイジエル・マンセルの名言

「どなた？」

「イギリスの哲学者。 で、なんの代表？」

「そのぐらいの意気込みでいきたいなと
「はあ……幼馴染の春ちゃんがケンブリッジとかオクスフォードへ行っちゃうと思
うと寂しいな……」

「わたし学問には向いてないね」

「向いてないな。疑問持たんからなチミ」

「あなたが持ちすぎなのよ。官僚とか向いてるとと思うんだけど」

「向いてると思うわ……向いてると思う」

「狙うか、次官」

「冤罪着せられて途中下車だな」

「怖いよね、日本ひどい国だよね」

「一番ひどいのは国民がひどい国だと認識してないことさ。人権侵害を調査・救済
する独立委員会が無い野蛮国だ、って国連にもう何十年もずっとせつつかれてんだ
ぜ？」ところがそれをダシにテキトーな法案を作つては政局で弄ぶ」

「そうなんだ。わたしも知らなかつた」

「ま頑張つてそのトーダイワホーとやらを駆使して、悪を斬る悪に成長してくれ」
「それで取り込まれちゃうんだよね。で本物の正義のヒーローが来て倒される、最
後は泣いて後悔する」

「最後泣くぐれーなら墮ちんな、つて感じだよなあ。『スター・ウォーズ』とかさあ」

「まあ、ドラマですから」

「なんかその俺最近その『上げて落として落として上げて』みたいなのに飽々してさ。あーはいはい、みたいな感じ」

「『放蕩息子の帰還』は永遠のテーマじゃない。ダメよそんなこと言つてフランス映画みたいなよくわからないもの撮りだしたら」

「いや違うむしろプリキュア」

「いやいや。なんでそんなこだわるの」

「最近むしろ子どもたちにウケる、つてモノの方が普遍性があるんじやないかと思つて……ドラちゃんとアンパンマン。俺もああいうの描いてヨレヨレのジジイになつた時に『先生！ 子供の頃からファンです！』つて言われたい」

「そりやわかるけどさ……あれ何の話してたつけ？」

「春がキヤリア官僚になるつて話。俺が思うに、『近代』というのは」

「また大きく出るねー今日は」

「近代とは、兵隊と工員と役人を量産するシステムなのさ。国家というのを一つの工場とみなして、その生産効率を最大化するには、決まりきつたことを高速・高精

度でただひたすらにやり続ける人間が大量に必要だろ？

だから教育、道徳、社会の価値観、全部それに合わせてある。疑問を持つたり、革命を志向したりするのは許されない、とまでは言わなくても無駄と嘲笑される。もちろん、創造もね

「じゃそんなのもうダメじゃない？」

「ご明察。そう今や決まりきつたことは、コンピュータが全部やつてくれる。だから人間は、コンピュータにできないことをやるしかない。創造とか、アイデアとか、」

「学習」

「まさに！　さすがにまだ自分自身を作り変えていくコンピュータは無いから。それこそが本当の意味での人工知能だな。いまは学習機能って言つてるのは要するにフレードバックどんどん入れて元からある選択肢の優先順位を変えてるだけだから

「でも、それも極めれば学習にならない？」

「んー……よく銀座のホステスさんが人を見る目、みたいな話があるけど「ん？」

「それって呑みの場での相対評価しかできてないから、たぶん全く新しいことをド

バツと言つたりやつたりする人は、まったく評価できないと思うんだ」

「あ。あー……そうかもね」

「さつきもあつたように、既存の評価軸で評価できること、こそが新しい価値を生むので、前もつて評価軸を与えられている時点で、本来の意味の学習にはならないと思う。ちょっと自信無いけど」

「ふむ……じややつぱり、学習がたいせつだね」

「そうだ。それを高める手法の開発も。よし、じやあ宿題にしようか。次官候補も考えておきたまえ」

「えー、簡単に言うと『勉強するモチベーションの湧かせ方』でいいのかな」

「ま言つちまえばそんなとこ」

「金、男、地位」

「お、肉食系」

「要らないんだよね、正直」

「ある程度でいいんだよなあ。だから先進国どこでも自殺しまくるんだよ。目標無くなつて」

「自己実現?」

「それってなんだ、いつたい。その中身の無い文言に俺たちは二〇年振り回された

んじゃないのか！」

「確かに何を意味してるかさっぱりわからない言葉よね。生きがい？」

「だからそれはトートロジーだつて。『やる気になる原因』をまとめてそう呼んでるだけだから、訳すと『やる気の源泉はやる気』」

「あそつか。んー……単純に、暇だから、つていうのは？」

「うお、おまえ暇だつたら勉強するのか」

「何もやつてないと不安になるじゃない」

「まあそなうだが。確かに、ナメクジも暇だと死ぬらしい」

「ホントにい!?」

「うむ。同じ迷路を何度も解かせていると、そのうち『それもう飽きました』と言つて動かなくなつて死ぬ」

「ホントかなそれ……でも暇はそれぐらい怖いよ」

「だからつて昼寝でもいいし享楽的かつ麻痺的な遊戯でもいいわけだし」

「それも飽きるんだつてば。ダメばつか出してないで君も考えなさいな」

「考へてるからダメが出るんだろ。きあ考えろ、おおげさにいえば、『生きる意味』を

「うーん……眞面目に考へたことないなあ……」

「ハルというその名のとおりしあわせな奴め」

「ツカサくんがその名のとおりなんでも思う通りにしようとしたがるんだよ」

「そおかなあ？ でも人として生まれたからには、自分の人生ぐらい思う通りに生きたくない？」

「ある程度はね。全部は無理だよ」

「自分が動かせるところは、さ」

「辛くない？ その生き方」

「納得してないものに従う方が、つらい」

「ポンちゃん真っ正直すぎるのよ。うまく『まかせ。逃げたり、いなしたり』

「男にはそれじや許されない時があるんだよ」

「それで体壊したら元も子もないじやない。誰も評価してくれないし」

「……」

「あ、怒つた？」

「いや……そのとおりだな、つて。女の子は現実的だな」

「わたしが」

「ああはいはい。じやきつと宿題にも現実的な解を用意してくれることだろー」

「あなたも考えなさいつてば」

「考えたけど出ないんだつてば。俺のポリシーはできるだけ楽をしたい。楽をするためにはどんな努力もする。学習とは正反対！」

「いや、それこそが学習ですよ。やり方を改良し、アイデアを出し、優先順位を付ける。ほらほら、がんばつて」

「いやだーかーらー」

たぶん、そう言われると自分がなぜ勉強をシコシコしてるのが言語化できないのを押し付けているのだろう。

しかしきつと僕らのぱるつぺなら何かテキトーな答えを見つけてくれる、はず、ではないか、と思つた。

「……でもポンちゃんさ、気をつけてね」

「ん？ なにが？」

「人生つて、世界つて、ままならないものだよ。ポンちゃんみたいに想像力豊かだと、その、ままならないことそのものに、いつも気づいてしまわない？」

「……」

時々切つ先を突き刺してくるんだよな、この人。

「『うまく』生きるためには想像力を時には部分的にでも封印したほうがいいよ」「それは俺が俺でなくなるということだから、要らん。誇りを喪つて生きていけるか」

「生きないと誇りも持てないよ。

ほら、インテリの人よく自殺するじゃない。きっとこここの矛盾に気づくと絶望するんだと思う。生きるためには、インテリを止めないといけない。でも止めたくない。だけど孔子様ですら、不遇だつたわけだし」「そこで折れなかつたからこそ二五〇〇年生き続けてるんじゃないか。大きな目で観ると人類は、成長してるよ、きっと」

「メタ認知ですか。好きねえ、それ

「でなきやなんの意味もねー絵なんか描かねーよ」

「機嫌、損ねた?」

「いや全然。俺インテリじやないし」

「芸術家も、同じだよ」

「……」

ままならないことなんかわかつて。だから、ま漫なるところはできるだけまま
であろうとするんじやないか。

あるがままで。

……手を取られた。

「死んじやダメだよ」

「死なん。そう言つてくれる人が一人でもイメージできるうちは、その人に悪い」

離される。

「……想像力つて、原罪だね」

「だが力だ。たぶんこの構造的な矛盾こそが、人類を前進させてきた力の一つだと
思う」

ねじれているから、なにかによつてそれが解放されると、勢い良く回るのだろう。

「……人間は仮面を被る。他者とコミュニケーションを取りやすくするために、言いたいことややりたいことがある程度我慢して、社会性を身につける」

「うん」

「ところがそれがうまく行き過ぎると、仮面が力を持ちすぎて、素顔を乗っ取ってしまう。仮面に食い殺される」

「うーん」

「人の気持ちを想像できる、という力は逆に、そんな悲劇も生みかねない。心優しい人だけじゃなくて、ほとんどの人がこの想像力の逆の刃に血だらけになつているんじゃないかな」

「そうかな……わたしそうでもない」

「まあ、ヤマちゃんはね」

この人は思つたこと言うので男女問わずアンチが多い。ただの一言も言葉を交わしていくなくとも、だ。もちろん俺や川崎や鈴木のように、その裏表の無さをこそ信頼する仲良しもいる。しかしその状況で平然としていられるのが、「強い」と思う。まあ、俺が気が小さ過ぎるのかな。いかんな。日本はダメだとか言つて自分が典型的な日本人つまり一番痛いところを突かれてるからこそ発狂するという、まさに

睡棄すべき似非知識人に成り果ててゐる。しかし

「……ポンちゃんもつとお氣楽に生きなよ。きもちいいこと、きもちよくやつて
「やつてないわけでもねーんだがなあ……映画観よ映画」

「うん！ 楽しみー」

「俺も。ラブサンシャイーーーン」

「ちよつ、やめて、やめて。それは観ないからね！？」

「フレーーーッシユ！」

『長時間の勉強はお断りします』

と いう貼り紙が目に入つた。

アホめ、人生いつでも学習だ、つづーの。
春の受け売り。

【芸術】

——宗が待ち合わせ場所に着くと、見知らぬ女の子に手を振られ……

「ばははははははははは!!」

ピッグテールも輝かしい春だ。

「ここ笑うとこ？」

「いや、いや失礼。ひよつとしてワタクシのために？」

「そ。映画奢らせるのがちょっと忍びなくなつて、せめて出オチで笑いでもプレゼンツしようかと」

「元取りました」

「では」

「いやいやいやいやいや、今日はぜひそのまで、そのまで」
「えー」

「似合つてゐるホント似合つてゐる。さ、観るか『プリキュア』」

「そんなこと言うとこの『韓流スター咲き乱れ！ 華の大江戸白虎隊』を観るよ
「なんだこれ……」

——しかし一本目終わると昼まで間があつたので、二本目も観た。

「……ふふつ。『プリキュア』楽しかつたよ。弱い子が勇気を振り絞るところとか、
泣けたね」

「そうだろ？ しかし『シユガーマン』は感動したなあ。まさに！ 芸術家たるもの！ あのよう生きねば！」

サンドイッチハウスで野菜マシマシを一本ずつ。頬張りながら差し向かい。

「……なにニヨニヨしてんの」

「いや見慣れてくるといいなあ、つて。春、もうそれで通せよ髪型」

「いやだあ。こういうのはプリキュア達みたいな、ブワツとボリューミーな髪質で
ないと……宗、やつてみれば？」

ふわ、ふわ……

「ほら、素敵な猫毛。……あ、ちょっと薄くなつてない？」

「エッグツ!?」

「嘘。そんなに喉にモノ詰めなくていいじゃない」

「せめて、せめて人生五十年下天の内をくらぶれば……くそつ、ちょっと見せろ分

け目」

「自信あります」

さわさわ……

「真っ黒黒助出ておいでだな……平安貴族かおまー」

「七つまで毎朝髪剃るんだつけ」

「三歳ぐらいかな。髪置の儀が七五三の原型になつたとかなんとか。ツヤツツヤだな……なんだワカメとか踊り食い?」

さわつ、さわつ……

「なんにも。なんにもしない方がいいらしいよ。お湯で流すだけの方が

「らしいなあ。俺脂症だからかそれじやベタベタなんだよ」

「それはね、しばらくすると抜ける。だいじょうぶ」

「そうなのか。んー……やつてみつか」

「おすすめ。……あでも」

「ふわん、ふわん……」

「この髪質だと……」

「口ごもるなよ」

「あーでも映画おもしろかつた。方や子供向け、方や無名のミュージシャンの話、なのになんでおもしろいんだろうね」

「それさ」

「お、ゲージツカさんの解説？」

「いや、俺もまだわかつてないんだが、聞いてくれる？　なぜ芸術がすばらしいのか」

「うんうん」

「俺も絵を描いているからさんざんいろいろな要素を検討したのよ、芸術における『おもしろさ』とは何かって」

「うん」

「要素要素で見つからないわけではない。演劇を例に挙げよう。たとえば役者の演技が巧い、たとえばバツチリ合った音楽が盛り上げる、たとえば脚本がジエットコンスター」

「そうね」

「ところが。まるで諺のように真逆のケースも見つかる。役者が大根だけどむしろそれが迫真を生む。音楽がミスマッチだからこそ面白い、脚本なんか無いに等しいから人物の心情に迫れる」

「ありそう」

「そう。ということは、この要素がこうあれば優れている、という方程式みたいなものは、無いんだ」

「ふむ」

「せいぜい言えるのは、このケースの時はこういうやり方がいい、ってことだけど、そんなものの組み合わせ無限にあるんだから、一々覚えてもられないしチェックもでききない。」

そう考えると最早『おもしろさ』が何かなんて、俺にはわからなくなってしまつた

「アーティストは悩むのはそこなのね」

「そうたぶんここ。つまり芸術の本質的価値は、『意味』でも『技術』でも『官能』でも無い。そこに気づいてしまう。ここで道標を失つて、道に迷うんだ」「ウケる、売れる……はもつとダメだね」

「それらはもちろん否定することじやないんだけど、自分ではコントロール不可能な事柄なので、そこに評価軸を置いてしまうと、あとは発狂するしかない」

「ビジネスではないもんね」

「まあビジネスとしてやつてる人もたくさん居るけど。

とりあえず意味技術官能、もちろん媚欺瞞おためごかし、それらは、本質的な価値……ここでは仮にその作品の『生命力』とでも呼んでおこう……を阻害する、ことがある

「なかなかコペルニクスなご意見だね」

「もちろん俺が例では信用がないので、いい例を上げよう。我らが師匠、近代絵画の父、セザンヌだ。

彼の絵を観れば一目瞭然、田舎の風景にテーブルの果物、つまり、『どうでもいいもの』を『巧くもなく』『美しくもなく』描いて、しかしそれは「すばらしい」

「そう！ 誰もがセザンヌを持ちだされればハハーとひれ伏すしか無いんだ。あん

な濁つた色で埋まるどうでもいい絵にね」

「はー……それはわかりやすい例だね」

「もちろん意味・技術・官能を全否定するわけじやないんだけど、それらはあくま

でその生命力を高めるために貢献しなきやならない。でなければ阻害する。
ということは。

ここに至つて俺が考えたのが逆作戦、つまり生命力の阻害要因を排除する、とい
うこと

「ふむふむ」

「そうそう。仮に、よ。

芸術が自然の再構築だとするなら、受け手の自由な再構築を阻害する要因を探す。
と、一番最初に思いつくのが実は『作者の意図』というものだ。

コミュニケーションと同じで、というか、芸術はコミュニケーション以外の何物
でもなくて、『相手をこう誘導してやろう』とか、『相手にこう思われたい』とい
う要素は、ありすぎると自然なコミュニケーションを、阻害するんだ。まあウケ狙
いとかも広くここに含んじやつてもいい

「だけど、芸術家つてみんな『これを伝えたい』と思つて得物を持つわけだよ

ね？」

「なんだ。ここが矛盾しているのが、例の昨日教えてくれた学習の『知』の話
だよ」

「あー……」

「伝えたいことを伝えられるところと伝えられないところにわけて、伝えられると
ころを的確に伝えて、伝えられないところは受け手にまかせる、つて感じかな?
自分の言いたいこと、と、自然に湧いてくるイメージ、の線引きをしていく作業
が、実作、作品づくり、かもしだれない。」

近松門左衛門の『虚実皮膜論』つていうのはこのへんのことを言つてるんじやない
かと……」

「なに、それは？」

「脚本の神様・近松先生がおつしやるには、

『虚と実の、皮膜のうちに芸がある』。

俺はこの言葉の意味もずっと考えてたんだ。ホントみたいな嘘をつけ、つてこと
かな、とか

「あるいは、生々しい現実そのものではなくて、エンターテイメントとしてオブラ
ートに包め。ドラマなら主役は美男美女で」

「そんな感じ。でもそんなあつたりまえのことを、さも秘伝かのように言うのかな
……と思つてさ。あるいは桂米朝師匠が、

『極まると演者は消える』

つて言うんだ。でも俺達は『米朝の落語』を聴いている」

「そうだね。極まれば極まるほど、演目とか、落語ですらなくて、『米朝』を聴いてるよね」

「そうなんだよ。クルマでもベンツはベンツっていうんだ。C180とか、車名ではあんまり言わない。作品というものは、作品ではなくて結局作者でしかないのかな、と」

「自分を消せば消すほど個性が出てくる……おもしろいね」

「矛盾というか、逆進性というか……」

「あ、でもそれって学習と同じだね。学ぶ時に、自分つてまあ言えば要らないじやない?」

「ああ、余計なものあると邪魔だな」

「そう。いつたん虚心に取り込んで、自分で中で化学変化を起こして、自分を変え るんだよね。」

「芸術の創造の流れと同じだよ。」

「ううん、その流れを『創造』というのかもしれない。」

「学習を阻害することって、想像力を阻害することだから、つまり創造力も阻害してしまうよ」

「そーうなんだよなー。だから芸術のおもしろさ、つていうのは、原因はまだよく

わからないんだけど

「それこそ神秘だね」

「ああそうそう。そうだ、神秘そのもの。ともかく、結果としては、受け手がその作品に触発されて生命力を高めるようなもの、それが『おもしろい』ってことなんだろう、と思うわけさ」

「抽象的だけど、まあ納得」

「すまん。もちろん、作家によってその『力』を生み出す方向性は違う。ある人は人間の姿、ある人は真実の強さ、ある人は笑いの癒し……」

「今日観た映画は二本とも、登場人物が真摯だったよ」

「そうだね。ああいう姿勢、『なにがあつてもこれを貫く』ってことは人間、できそうでなかなかできない。だから憧れる。これもまた、人間の生命力のひとつ」
「ううなんだよねえ……ターキーブレストかえびアボカドかなら、ツツバれるんだけど」

「だよなあ……」

二人は二つ目を頬張る。

「だいじなことほど、折れちまう」

「むしろだいじなことで折れてるから、日常で八つ当たりのようにどうでもいいことで折れないんだよね」

「店にクレームつけて発狂してるオッサンオバハン見てるとああ恵まれてないんだろうなって可哀想になる」

「一人の人間として扱わずに、客っていう抽象存在として扱うお店にも責任あるよ。昔ながらの商店街とかならあんなこと起きないもん」

「しかしある程度匿名性をキープしないと都市生活はやつてけんから……ほら、こことだつてもし顔なじみだつたら、ここ映画来るたびにここ来なきやいけなくなるだろ？」

「まあねえ。難しいね。

「でもおもしろかつた。今度からそんなところを注意して観てみるよ」

「いやいや、まだ極意とかわかんねーんだけどなあ」

「特に『芸術はコミュニケーション』というところがカツコ良かつた。そういうえば、

いい作品との間には、なにか感情が交流するような気がすね」

「そうそう。『グツとくる』とか『ピンとくる』つてヤツさ。それには、テーマも巧拙も完成度も、なんも関係ねー」

「うんうん。その、感動が伝染していくようなものが、いい作品だよね」

「いいこと言うねえ。そうそう。思わず誰かにこの感動を伝えたいと思う。それはまた芸術を生む」

「あつ、そうだねー。じゃ増幅していくんだ」

「いいねいいね。この輪が波紋のように拡がっていくと、人類は幸せになるのだがなあ」

「波紋は広がるにつれて力を失うんだよね……」

「だからそこを受けた人が力を出してさらに増幅してだなー」

「ネット世界つてそんな感じ」

「ま、一番いいケースではそうだな。伝染力は芸術の大きな力のひとつだね」

ジンジャー・エールとハーブ・ティーを傾ける。

「……ハーブ・ティーのも大雑把だな」「たぶんカモミールがメインで」

差し出されるカップ、交換して。

「……ジンジャーエールたまに飲むと美味しい」

「……んー俺の鼻では他にどんな草が入ってるかわからん」

「草つて言うな」

「同じだろコカインや大麻と。薬草なんだから。人間が差別してるだけで
「まー。生姜だつてそうじやん」

「もちろん」

戻す。

「……あ、んじやあ、昨日の宿題の答え合わせすつか。『学習のサイクルを加速さ
せる方法論』」

「ふふふふふ、なんかもう答えてる気がするけど」

「そうだな。じやあせーの、で
「せーの」

「「芸術」」

「あはは」

「ははつ。いや意外なところから答えつて飛び出してくるもんだよな」

「ううん、論理的帰結だよ明智君」

「えつそれ誰のセリフなの」

「ホームズ。じやわたしから論理的な説明をしようか」

「小五郎聞きます」

「かんたんなことだよ。つまり、『学習』のサイクルを回せば回すほどいいんだから、一番いいのは、サイクルを回すことそのもの、学習そのものが楽しいこと、だよね。すなわち……あたりまえのことだけど、おもしろいと感じることをやること

「うんうん」

「サステナビリティって言葉があるけど、なんでも持続可能であれば必然的に学習が進んでより進化するわけだから、持続可能性をキープすることが先決だと思う。いわば学習の永久機関だね。

好きなこと。楽しいと思えること。それから、底なしに追い求められること。
それってすなわち……芸術の、ことじやない？」

「うむ」

「学習サイクルが永遠に回ること、それは学問でもスポーツでも手工芸でも、料理

でも庭いじりでもそれこそボランティアでも、なんでも芸術なんだよ」「すばらしい」

ぼふぼふとサンドイッチの紙を叩く宗。

「予想外に素晴らしい答えに本田感動しております」

「えつへん。……予想外とはこの山葉、甘く見られたものだね」

「なるほどなサステナビリティな、流行りの単語も交えさらには『なんでも芸術な

のよ』と全方面にいい顔をする。百点の解答だ」

「そういうポンちゃんは?」

「あいや俺のは妄想科学なんだけど……聞いてくれる?」

「わざわざ断らなくともいつも妄想じやない」

「可愛くねえなあんたは……ゴホン。えー俺は逆に、想像力つまり原罪がほおつておくとなぜ減衰していくのか、意識から落ちてしまうのか、こつちを考えた」

「阻害要因を潰すわけだね」

「そう。脳という器官が凄まじい大飯喰らいなのはご存知だと思うが、つまり想像力のエンジンである脳も、いや順序が逆か、とにかく脳こそが、諸刃の剣なんだ。」

使うと大変強力だが、ものすごいコストが掛かる

「ふむ。なんとなくわかる」

「だから基本的には、人間考えたくないんだよ。エネルギーを浪費するから。だから、抽象概念を発達させ、言語を発達させ、その伝達手段を発達させて、『一回誰かが考えてくれたことは、考えなくとも使えるように』した。これ素晴らしい工夫

「なるほど」

「つまり環境や状況が変わらない限り、『言い伝え』や『しきたり』、時代が下れば『常識』や『法律』を守つていればのんびり生活ができる。判断しなくていいからエネルギーを使わない。ところが」

「そうはいかないよね」

「そう。さまざま要因で環境は変化しうる。その時、頭を使える人間が存在しないとヤバイ。だから脳、いや想像力を、刺激し続ける必要がある。半ば強制的に想像力を起動させる方法……これがすなわち、芸術」

「なるほどー」

ぱしやはしやと紙コップを叩く春。

「美術の先生に聞かせたいぐらいの名調子だよ」

「それは今でも何千年も続いていて、太平の世の中であるならば、せいぜい与えられた正解を暗記して高速で出力する官僚的能力、これが求められる。だからそういう人物が生存競争上有利になる。」

ゲームのルールに疑問を持つてたら、ゲームには勝てない。

けれども環境が変化し激動の時代になつて、ゲームそのものが変わつたり壊されたりすると、ルールを考えるような人間、こつちが必要になる」

「あつ、それって構造が似てない? ポンちゃんの二つの認識齟齬と」

「結局陰陽図みたいなもんで、二つの方向がミシミシ音を立てるところにダイナミズムが生じるのかもしねれない。」

ともかく、革命家は現在のルールで勝つている人間にとつては邪魔だから」

「排除される。けれども環境の変化が大きくなりすぎるとどちらにせよルール変更すなわち革命は起くる」

「ただ、起きてしまえば、また新しいルールが必要になるので、革命家は不要になる。西郷隆盛は城山で死にチエ・ゲバラはボリビアで死ぬのさ」「哀しいねえ……」

オープニングテトに手が伸びて譲りあう。

「……とにかく、ぱるつぺ的に言えば、自分の中にそれぞれの『芸術』を見つける、作り出す、つてこつたな。趣味でも勉強でもなんでも、その中にずっと浸つていればしあわせ、みたいな」

「ポンちゃん的に言うと常に意識的に頭を使え、とにかく考えろ、つてことだね。そうしないとすぐ使わなくなる」

「TV観てると学者でも芸術家でも馬鹿としか思えないヤツいっぱい居るじやん。反面お百姓さんや職人さんで叡智の塊みたいな人がいる」

「そういう人達は、決まつたことをやつてるようでいて、毎回違うのよ。だから全身全靈で立ち向かってるんだろうね。逆の人達は、自分の頭の中にある決まりきつたことをやつてるだけだから、貧しい」

「それもたぶんポイントで、頭、つて言つたけど結局全部なんだ、身体感覚とか、第六感みたいなもんとか、カラダ全部、全人格」

「そうだよね。それもこうくるつと一周したね
「うん。合理と神秘と、両方」

「ということは、芸術に取り組んでいると、そこもうまく噛み合うようになるのかな」

「だといいな」

「いいな、つて絵、絵画、描いてるでしょ」

「いやあ……あんまり噛み合わねーんだよ……まあでもそこがおもしろいといえばおもしろいんだけどなあ……」

「ふふふ。ポンちゃん、映画は撮らないの？」

「無理無理。子供の頃一度ビデオ回したことあつて」

「撮つてるじやない」

「あの画面一秒一秒全部計画通りの画面作らなきゃなんないんだぜ、役者だけじゃなくて背景にライティング、全部。映画なんて狂人の作るもんだ」「でも結局なんでもそうじやない？ 劇もそうだし、マンガだつて、そうアニメだつて。小説だつてそうだし」

「まあ、まあ、そういうなんだ、けどさ。逃げらんないんだよ。マンガとか劇だと書割ボーン置いて『ヴエルサイユ宮殿』とか言えるけど。そんな映画嫌でしょ？」

「まあそういうけど」

「抽象性を極限まで追い求めて普遍性を得るのが詩なら、逆に具体性を追い詰めて普遍性を生み出すのが映画だと思う」

「ん？ 具体性を追い詰めて普遍性を？」

「えーっと、なんてかな……そうださつきの『なりきる』って話。芸術はなんでもそうなんだけど、いわば『自然を、創作者が、再構築する』、わけさ」

「うん」

「そんときやり方は方向性として二つある。

ひとつはできるだけ記号のようにして、たとえば『ここに』」

紙ナップキンに、『花』と書く。

「……これ花だ。ぱるつへはこれを観て自分の中に何か花を想い起す
「なるほどね」

「自由度が高い分、豊かでもあるが、作家が受け手に委ねる部分が大きい。自分のイメージが伝わる割合は低い」
「ふむ」

「逆に」

チューリップを描く。写実的に。赤ボールペンで色も着ける。

「これも花だ」

「つまりポンちゃんのイメージはより伝わるけど、わたしのイメージは限定されるね」

「そう。けど、チューリップを観て欲しい、体験して欲しい、と思つたらこつちがいい。」

さつきのが詩で、これが映画。

具体的な場面を作りこむことで臨場感たっぷりに擬似経験してもらつて、そのことでむしろ想像力を搔き立てる。本当にヴエルサイユ宮殿の中にいるマリー・アン・トワネットになつてもらう。

芸術での『うまさ』という言葉は本来、この想像力を搔き立てる力の大小に使うべきであつて、技能的な精度や密度を使うから話が混乱するんだ。せいぜい表現力の幅に対してもうべつて、誰と誰を比べて、とかなんの意味もない。

そう芸術は、どれだけ魂を震わせられるか、それ一点だ！」

「ポンちゃん……いろいろ考えてんだね」

「まかせろ。考える前に絵筆を取れといつも叱られている」

「おーおー可哀想に」

「芸術家がー！」

「官僚か商売人のようなことをー！」

「言い出したら終わりだー！」

「でも映画観る方的には封切りに間に合って欲しいのよ」

「はいおっしゃるとおりですすいません。

まあでもなあ、『効率』って近代的な考え方が芸術をダメにしてる部分はでかいと思う

「そうだね。そういうのに追われる毎日から逃れられるものが、芸術やエンターテイメントだから。本来は、一番そういうところから遠いものじゃないとダメなはずだよね。無駄なら無駄な方がいいというか」

「うん。芸術、教育、医療に福祉、それから食べ物とか水に空気、安全。とにかくだいじなものほど『効率』で語れないものばかりだよ」

「元々その『時間で割る』つて概念そもそもが、大昔には無さそうだね」

「そうかもしれん。悠久の流れの中の仮住まい、的な。やっぱり商売と、なにより

工業生産が強めた概念じゃないかな」

「進化の意思といえばそうだけど

「またおんなんじ話だけど便利な道具ほど諸刃の剣なんだ。使うべきでないところにまで使つちまう。誇りや尊厳、敬意、愛情。感動に心の平安、そんなものだつてどれだけ侵食されるかわかりやしねー」

「あるある。パツク旅行の分刻みとか。本末転倒だよね」

「気持ちはわからんでもないんだがな。ガウディじやあるまいし三百年掛かりますと言われても困るのは困る」

「それこそサステナビリティじゃない？ 次また来たいな、とみんなに思つてもらえれば、それでいいんだよ」

「……ふむなるほど。それはいい線引きかもしけん。芸術とカネはいつも綱引きになるんだけど、『最低限の持続可能性を担保する』つてのはいい頃合いだ、つーか自動的に物理的にそうだし」

「そうかも。レオナルド・ダ・ヴィンチクラスになると、描きかけの絵でもありがたがられるもんね」

「キユーブリックが赤字の映画ばつかりだつたりな。いやさすがばるつべ」

「ふふ、これも実は受け売りなのよ。P・F・ドラッカー」

「あーなんか女子高生が読むヤツ」

「ふふつ。彼が『利益は、会社を持続させるために必要なものであつて、目的ではない』と喝破したのね」

「じゃ目的は?」

「社会貢献。社会にとつて存在意義がある企業が、生き残る」

「なあほど……俺の絵は存在意義あるかなあ……」

「あるわよお。美術部の展示無い文化祭なんて第一恥ずかしいじやない」

「かたじけない。ウチの学校喰いもん屋ばつかだかんな……」

「あれちよつと異常だよね。なんであんな食い意地張つてるだろう……でもそう考
えるとみんな感謝が足りないよねポンちゃんたちに」

「ははつ。まあ書道部や陶芸部や文芸部や演劇部やブラバンや……みんな居るから。
芸術つてのはそういうものさ。要らないもんなんだよ基本的には。でも、あると
いい。

今の話でいうとつまり触媒みたいなもので、人の想像力をぐつと掻き立てる。そ

れが社会の力に、きつとなる」

「じゃやつぱポンちゃんたちに感謝しなきや」

「何を言う、君もやるのだ芸術を。さつき自分で言つたろ、『学習サイクルが回る

ものはなんでも芸術』だつて。絵筆を取れば誰もが画家、文章を書けば誰もが作家、だ

「でも私の絵じやサステナブルじやないよ」

「いーんだそんなの。『画家』と、『絵でお金稼ぐ人』は、別！　だいたいマンガ家や作家になろうとして挫折した人の話聞いてると『マンガ家になりたい』って話ばかりで、『こんなマンガを描きたい』って話がないんだよ。描きたきや描きやいいだけさ。その瞬間から誰もがマンガ家」

「ポンちゃんらしいなあ……じや明日から画伯と呼ぼう」

「ああ今日から呼び給え。いやまだ修業中だから伯はつかないかな……」

「一生修業じゃないあんなの。でもわたしポンちゃんの絵好きだよ、なんとなく」

「なんとなくか」

「いいと思うんだけど、優しすぎるのかな。あんまりこう、グサツとこないなんだよ

ね」

「グサツ」

「だから人に薦めにくい。お金を出そうとも思いにくい」

「ううう……き、きたんなき」いけんを……ぐふつ」

「あつ、ごめんごめん。でも、好きだよ」

「うう……何が足りないのか……」

「そこはこれから考えなきや」

「俺はまだ画家じゃないのか……絵筆を取つたら画家だと思つていたの、だが」

「なんだろうね、そのピリツとしたもの、つて」

「んー……芸術は基本的には自給自足なんで、まず自分が満足しないと始まらないとは思う。俺は一応、俺の作品にはいつもそこそこ満足はしてる」

「そこそこじやだめなんだよきつと。説得力がない」

「んー、そおかもなあ……俺が思うに、絵に限らずなんでもそうなんだけど、要は感動の源泉つて『差』だと思うんだよ。ズレ。落差。段差」

「どれだけ大きく跳べるか、つてこと?」

「いや、差は別に大きくなくていいんだ。意外性というか、驚きというか、ナックルボールというか……ここで『どう差をつけるか』なんて技術論になるときもしるんだけど。

「普段そんなことしそうにもないぱるつペが可愛い髪型してるから、可愛いんだ」

「褒めてんだから素直に喜べ。」

「普段からそんな髪型の子が多少ひねつても、あまり感動はない」

「なんとなくわかる」

「んーなんてつたらいーだろーなー……そう、予測のつかなさ、というか。自分で
も。一筆入れたら、そこからの刺激でさらに新しい一筆が新境地に入れられ、どこ
へ連れて行かれるんだろうと自分が一番ワクワクし……」

「まつたく学習と同じじゃない」

「あ、ホントだ。……じゃ俺には、学習するという姿勢が足りないのか」

「ふふ、そうかも。ほらポンちゃん謙虚なくせに自信家だから」

「うあ耳が痛い……でも芸術はもちろん、想像力そのものでもあるから……確かに
想像力には新しい想像力を生むポジティブ・フィードバックがあるね。

……ということは、だ。これらはつまり円環、回路になつてて、原罪であるところの想像力を働かせれば、学習回路がよく回り、それを維持し続けるには芸術に昇華することが必要で、芸術ならば想像力をまた高めていく。逆にも回る。想像力を發揮すればもちろん芸術が高められ、それはよき学習を呼び、また人類を楽園から追いやる想像力を膨らませる

「おー、美しいサイクルだ」

「原罪・学習・芸術。これを『GGG』と名付けよう
「美しくない。『トリニティ・スペイナル』とかなんとかさー」

「うつ。それ割といいな。いや、いや駄目だ、そういう『それっぽい』カツコ良さはもう古いんだ、そもそもとナチュラルに」

「なに才口きてんの。でも、つまり、このサイクルそのものが人間の宿命……みたいだね」

「そうだなあ……だから、樂園から出してしまった、つまり飛んでしまった以上、飛び続けるしかないのさ。選択肢は無い。だとしたら、飛び続けられるように飛ぶしか、ない」

「やれやれ、だね。でも、なんかすごく、こう、生きるつてことの心臓部、エンジンを見るような気がする」

「エンジンなんだって。つまり『生きる』つてことはこのサイクルを回すこと、そういう、『生きることそのもの』が目的なんだ。

だから『生きる目的』って言葉は本当は、無いんだよ。

あ、俺なんか今いいこと言つてる」

「ふふ、そんな感じだね。……昔観た映画でね、岩手の山奥でおじいさんと二人だけですーっと暮らしてたおばあさんの映画があつて」

「うん」

「一日のキツい労働が終わつたあと、お茶を飲んで『はあ、極楽』って言うの」

「それだ」

「それだよね。決して辛さからの解放が言わせた言葉ではなく」

「『知ることとは知らないことと知っていることをわけること』なら、生きるとは、生きてるつてことを確認しつづけることだ」

「逆に生きることそのものが極楽である、平安である、なら、そう感じられる生き方を模索して、じりじり近づいていく、その動きそのものが生きるつてこと、かな」

「そうとも言える」

「じゃやつぱり、その意識を持ち続けるためは、このサイクルをぐるぐる回さなきや」

「だから……とどのつまりは最後の締めは、そのおばあちゃんがいつも心に持つもの……すくなわち、愛！」

「基本だね」

「このサイクルは回そうとしないと回り始めない。最初の火種、最初の一手、これこそが愛」

「うんうん。勉強もとりかかるまでが大変なんだよね」

「絵もだよ。描き始めりや勝手にできくんだけどなあ」

「慣性もあるけど、結局のところ、このサイクルつて閉じてるから、最初のひと押
しは『何か』が必要なんだよ。スイッチ、オンつていう」

「それはもう愛以外考えられないな。

「どんなに小さな作業でも誰かを痛めつけると思えば気が引けるし、かなりキツイ
仕事でも誰かが喜ぶと思えば取り掛かる」

「まったくそのとおりだね」

「愛さえあればこのサイクルが回り始めるし、大きく回るし、楽しく回るし……な
んか物事始める時つてさ、重い玉を山頂まで力いっぱい押していくイメージがあり
すぎるんだよな。」

これもきっと『近代』の罠だぜ。自分に合わないことでも頑張れ頑張れって、国
家や組織にとつて必要なことを無理にやらせる。それができない人や反発する人を
ダメ人間扱いすることを子供の頃から繰り返して、従順な奴隸を量産してんだ」

「うーん。でも人間が生きていくためには社会というかコミュニティへ適合したり、
仕事の能力を高めたり、ということは必要だから……でも確かにその境目は、曖昧
だよね」

「わざと曖昧にしてんだよ。言うこと聞かなきや生きていけない、つて強迫観念を
植え付けてるんだ。教育つて名の元に。でも実は、この重い玉つて割と平坦な道を

行くこともあるつて」

「山あり谷ありはあつても」

「そそ。むしろ車輪みたいに、押せばほんと勝手に転がるもんなんだよ」

「WHEEL OF FORTUNE……運命の輪」

「おおどうしたの今日は山葉さん。美しいわよ」

「おほほ、今言つてちょっとキレイかな、つて思つた」

「才能あるよ、詩人の」

「そうかね」

「つまりまとめると、

『運命の輪は、愛で回せ』」

「うんうん、いいかんじ。この輪もぐるぐる回すんだけど、想像力も学習も芸術も、

その中で回すんだよね」

「ああそうそう、フラクタル構造、かな」

「つていうか渾然一体つていうか」

「そつか、分けて考えると貧しくなるな。ていうか……」

「これ全部まとめて、『愛』？」

「想像力で相手のことを想い、学習で相手との関係を良くし、芸術で想いを伝え合

う。愛以外の何物でもねーな。

「運命の輪、その名は愛。そしてそれを回すのも愛」

「きつとこれを手に入れたからこそ、神様は人間を楽園から追い出したんだよ。『もうお外でも大丈夫』つて。

「愛が、すべてさ」

「ああもうぐうの音も出ない完璧なまとめだ」

「どやあ。

「ふふつ、二人で、二人で」

「おうそりだな。じゃ、せーの」

「「どやあ」」

「ふふふ」

「わはは……自己増殖性にサイクル性。なーんだ愛なんて理屈は簡単なもんだな」

「実践が難しいんだって。でも、愛すればだいたい返つてくるよね」

「てか返つてこない奴からはすぐ離れる。キリストじやあるまいし、敵まで愛して
る暇ありませんて。味方、好きな人きもちいい人、そして愛をくれる人」

「わたしは？」

「めっちゃ貰つてるよ。髪くくつてくれるからな。ウチのネコどもなんかニヤー言

つて転がるだけだ。むしろそのぐらいでもいいんだよ」

「じゃファイードバックに、つきあつてもらおつかな」

「お、どこ行く」

知らぬ間に昼下がりになつて、店内が混んでいた。二人は席を立つ。

「北欧雑貨のお店ができたの。そこ行きたい」

「ああいいな。あ、俺ペツトショツプ寄つていい？」

「まだ餉うの!?」

「いやいや、エサなんか変わつたの無いかなーつて。ウチのアホどもよく喰うんだよ……」

「あつ、喰うで思い出した、今度駅前にできたホルモン屋さんに連れてつてくれない？」 女の子同士で入りにくくてー」

「ああほいほい。ランランとか？ じや川崎も誘うか」

「川崎君ダメだつて。貪るから」

「あそーだな絶対割り勘負けするからな……ランも喰うしなあ」

「じや二人でこつそり行こつか」

「そーすつか。てか夜行く?」

「えつ、そんな思い立つたが方式でいいのかな。今日すでに結構盛りだくさんの
に

「好きなことだけ、好きなだけ。

すぐ死ぬぜ、俺達」

「……お母さんに連絡する」

「うううい」

「ポンちゃんはマツマに言わなくていいの?」

「ウチは食い物はいつも何か放置してあるウチなんで……」

「あれすごいよね、カレーソースがいつも煮立つてて」

「マイマザーの乙女のポリシーは『カレーさえあればカレーライスとカレーうどん
とかレーパンとインディアンカレーがすぐできる』……肉喰お肉」

「腸とか胃とか尻尾とかですよ」

「おまホントに女か。ハラミぐらいあるだろー」

「さあ……」

「そんな本格派なの!?」

「さきペツトショツプ行こつか

「この女は!!」

「あつちよつと待つて、階が近いから言つただけ、階が近いから」

「ホントかー!?」

「あじやあホルモン止めてケンタにする?」

「肉から離れろ」

「もめんどくさいなあ、じゃポンちゃんずっとビビンバクッパビビンバクッパで
喰うよ喰う」

「ツカサくん優柔不斷で女の子みたい」

「この……あ俺ここで珈琲豆買うわ」

「あ、なんか良さげな食料品店」

「見てくか」

「うん」

ゆるゆると運命の輪を回す二人。

【感染】

「聞いたよ。ぱるるん。うんうん、ついに収まるべきところに収まつたというか……」

「おばちゃん、嬉しい！」

「はあ。

……なにが」

「にやにをトボケちゃつて！ ポンちゃんとくつついたこと！」

「あああれね。

……ハア？」

「もういいからいいから。いまさら隠さなくつても」

「いやいや、いやいや」

「だつてこないだ日曜映画観に行つて二人でご飯食べて超デートでしょ？」

「そりや古馴染なんだからそのぐらいしますよ。デートとかじやない」

「いやーサンドイッチ食べながら二人で一つのストローで回し飲み！ さらに夜は！ 焼肉でニンニクで精力つけてつけてハツスルハツスル！ 脂ぎつたオツサンとトウの立つたキヤバ嬢かおまいらは！」

パン。

「いた……ちょっと話歪み過ぎ。誰その情報源

「梶場つち。たまたま見かけたつて」

「あの子一〇言葉吐くと一二東スポでしょ!? なに焼肉まで尾行して来たの!？」
「暇だつたからつて。なんかパルちゃん超可愛い髪型してて二人ともニヘニヘ超笑
つてるからこりや面白いってんで」

「プロの野次馬か……ちょっと待つてそれは誤解
「じやなに行つてないの映画」

「行つた」

「サンドイッチ食べてないの」

「食べた」

「焼肉は」

「……行つた」

「なんか横ペツターくつついて食べさせ合いでたとか」

「狭いカウンター席だから。生センマイ気持ち悪いっていうから無理に食べさせたら
報復でプチトマトねじ込まれた」

「デートどころかセックスだそれ」

「フア!? いやデートとかじやホントに無いから。ホントにそれは。ツカサの名誉のためにも」

「わ。もう『ポンちゃん』じゃなくて名前呼び捨て！ 名前呼び捨て！」

「や、待つてつてば、今のは勢いで」

「無意識！ 無意識最強そして最高！ それこそ真っ赤な炭火の遠赤外線を浴びながら金網の上に踊る焼肉・ラヴ！」

『ほら……僕のギアラをお食べ』

『わたしもう、トントロ』

オモニ！ いいから冷麺作り始めて！」

「ラン、大丈夫？」

「えーんじやなんだつづーんだよー愛の交歎ラヴ・アフェアー以外のなんだつづーんだよー」

「いや、えーつ……と」

「ほら答えらんない、ラヴ＆ピースじゃん
や。んー……」

「それはね」

「……本田。おめでとう」

「ありがとう。

なにが」

「ま、お前も黙つてりやモテるのにあーでもないこーでもないと余計なことばつかり言つてわざと女子どもを近寄りがたくしてたの、あれなんでなんだ?と思つてたらやつぱりそういうことか」

「はあ。

なにが」

「結婚式には呼んでくれよ。じゃあな」

「待て、いつにもましてお前の言うことがよくわからん。なんだ、いつたい」

「春ちゃんと結婚すんだろ?」

「は? 誰が」

「おまえが」

「ちょっと待てつて朝からドツと疲れたなんだそれ。誰がそんなデマにもならんデマ流してんだ。そんなもんありえねーって見りやわかつだろブーチンが実は女だつたつて言われるよりありえねー」

「照れんなつて。俺にはお前ら二人がくつつく方がビン・ラディンが実は死んでないと言われるよりも意外性が無い」

「えーと……いやどつちがどうとかどうでもいいんだ。誰だそんな嘘並べて売つてるヤクザ露天商」

「鈴木が言つてんやから間違いないだろ」

「一番間違えてそうなヤツだろ。なんでランそんないいかげんのこと」

「なんかお前ら二人がショッピングモールでイチヤイチャモチャモチャしてるところを誰かが見てたのを聞いたらしい。ありえないほどチアワセソウーな顔でお互いの頭ナデナデーを延々繰り返していたとか……ファックユースホール」「いや待て待て、それは野球の守備練習を田んぼの草引きと誤解するほどの大いなる誤解だ。映画観に行つて、飯食つて、のんびりしてただけだつて」

「いちやいちやじやねいか」

「お前と俺とで映画行つて飯食つてダベつてたらそんな風に言うか!?」

「鈴木が見たらそう思うかもな」

「腐女子脳だからなヤツは……いや！　だつたらそうじやないだろ!?」

「俺的にはそういうことはどうでもいいんだよ。俺はいつまでも煮え切らなかつたお前ら二人がやつとくつついて安心した。ただそれだけのことなんだ」

「いやだーかーらー」

「じゃ何してたんだデートじゃないとしたらそんなところで二人つきりで一体何を。

説明してみ?」

「いや、んー……」

それは、だな」

「あ、川崎くーん」

「鈴木。なんか様子が変だぞ」

「あれ、ポンちゃんも? ぱるるんもだつた。これはあれだね、確實にラヴ・ディ
シーズそ^う病オブ恋」

「てことはやつぱり本当なのかなあ。いやいや本当の方が友人としては喜ばしきこ
となんだが」

「うんうん、そーだね。だつてさ、それ以外考えらんないよ、すつごいこと言つて
たよ春ちゃん」

「おう。ポンちゃんもだよ。ま奴はいつも変なこと言つてんだけど、今日はとびきり
変だつた」

「ホントに？ だつてさ、一人でね、ふふ、

『運命の輪を回してた』

だつて！」

「うわ洒落になつてねー……本田も全く同じ。

『運命の輪を回してた』

つて

「マアジイ？ ヤッバー!!」

「頭ン中完全にお花畠じやねいか……でもちよつと、羨ましい」

「ああコワイコワイ。あのクールビューリィーとワールドナナメウオツチャ一ーがそ
んな浮つついたキラキラセリフをハモンズするなんてネヴァー・シンジランナ
イ！」

「恋は人間を変えちやうものさ……鈴木さんも、いいひと見つけなきいよ」

「川崎くんもね。はあ……『運命の輪』かあ……Wheel of Fortune ですよ。大ア

ルカナ No.10」

「いいなあ」

「いいねえ。

じやなくて、だからその輪、自分で回さなくちゃダメなんだよゼツツー」

「ランもな」

天は自ら助くる者を助く。

■参考文献

安富歩『超訳 論語』

■ねぐら

『運命の輪』

作者 ながたかずひる

発行日 2013.3.17

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata



Wheel of Fortune
Powered by Kazuhisa Nagata